

# アーネスト・ヘミングウェイに おける女性達(2)

—— やがて受容へ ——

丸 田 明 生

## I

ヘミングウェイは、『持つと持たぬと』(*To Have and Have Not*, Scribner's, 1937) の中で臨終のハリ－・モーガン (Harry Morgan) の言葉「人間は一人ではだめだ。今じゃ、だれも一人では……」(One man alone can't got. No man alone now. .p. 225) にみられるようにこれまでの彼の世界、即ち孤高の世界とでもいう世界から、いわばやゝ彼には不向きな、連帯の世界ともいうべきものに心を動かされ始めていた。「キリマンジャロ」の中でもこのままで終ってはならないという彼の文学への深い内省の中にその片鱗はうかがわれたが、この時期におけるスペイン内乱の勃発はヘミングウェイにとってその意味でも極めて幸運であったと言えるかも知れない。戦争の勃発が幸運ということは穏当な発言ではないがヘミングウェイの場合は別である。というのは彼は次のように言っているからである。「わしは戦さに出た男や、<sup>かなわ</sup>不真になった男が好きでたまらんだ」(He only loved people, he thought, who had fought or been mutilated. *Across the River and Into the Trees*, Chapter 8)

1936年の感謝祭の頃には——スペイン内乱は7月に勃発——彼にはあの青春の思い出の中のスペインがぐっと身近に感じられるようになって

いた。折しも北米新聞連盟の総支配人ジョン・N・ホイラーから「北米新聞のために戦争の記事を書くことを考慮してほしい<sup>1)</sup>」という手紙をヘミングウェイは受取った。第一次大戦時と同じ血がヘミングウェイの中に湧き立ち始め、二番目の妻ポーリンとの間に波風が立っていた故もあってかヘミングウェイはこれに丁重な返事を書いて応じたのである。更に彼にはそれと殆んど同じ時期に三番目の妻となるマーサ・ゲルホーン (Martha Gelhorn) との出会いがあった。そしてもしこの出会いがなければ『第五列』 (*The Fifth Column*, 1938) も『誰が為に鐘は鳴る』 (*For Whom the Bell Tolls*, 1940) も生まれなかったかもしれない。マーサ・ゲルホーンは、ワシントン大学医学部教授の父とプリン・モア大学の卒業生である母を持つインテリ階級の出身で、ヘミングウェイの最初の妻ハドレーと同じセントルイスの生れだった。ヘミングウェイとマーサとの出会いは、ヘミングウェイの掛り付けのバー、スロッピー・ジョーズ (Sloppy Joe's) だった。—〈筆者も先年このバーを訪ねて二人の出会いを偲んだ〉—それは1936年の12月のことだったが、アメリカ最南端のキー・ウエスト (Key West) のこと、12月といえども暖かかったのか、ヘミングウェイはショートパンツに薄ぎたない丸首シャツといういつも通りの恰好だった。その日のヘミングウェイと妻ポーリンの反応をケネス・リン (Kenneth S. Lynn) の *Hemingway* から引用してみよう。

暗くなってバー (スロッピー・ジョーズ) に灯りがともされた。しかしヘミングウェイはまだこの新しい友—マーサのこと—と別れるそぶりをみせなかった。彼はキー・ウエストの歴史について話し、島の案内を申し出、どこで水泳が楽しめるかを教えてあげようと申し出た。一方ホワイトヘッド・ストリート (ヘミングウェイ家のある通り) では、ポーリンがイセエビの夕食をつくり、チャールス・ロリーン・トンプソン夫妻と杯をかたむけていた。遂にポーリンはチャールスにスロッピー・ジョーズに行ってしまうのでアーンネストが帰らないのか見てくれるように言った。バーでは、ヘミングウェイは夕食には帰らないが、あとで「ペナのバラ園」で会おうと言ってくれと言った。トンプソンが帰っ

てきてポーリンに報告した時、彼女は直ちにミス・ゲルホーンはどんな容姿なのか知りたがり、彼女が若くてブロードだと知って心を痛めた。<sup>2)</sup>

ポーリンには恐らくこれまでの夫の女性に対する接し方からこの不安を持ったに違いない。数日後ヘミングウェイがゲルホーン一家——マーサは母親と弟と一緒にキー・ウエストに来ていた——に島の案内をしていた時、通りを歩いていたポーリンに合って車を止めて乗り込むように言ったが、ポーリンは不機嫌だった。マーサは数年後、そのポーリンの不機嫌さは「嫉妬だとは夢にも思わなかった」<sup>3)</sup> と言っているが、それは彼女のself-servingというべきだろう。何故なら「マーサの方からもヘミングウェイに何かを求める気持が強く働いていたことは衆目の認めるところであった」<sup>4)</sup> からであり、又マーサが母親がセントルイスに帰り、弟が学校にもどってから一週間キー・ウエストに居残ったのは、ただ水泳や日光浴のためばかりではなさそうである。この時点で既に二冊の本を出版していた彼女にとってヘミングウェイの文学的名声は大きな吸引力であった違いはない。やがて「マーサ・ゲルホーンがセントルイスへの帰り旅の最初の宿泊地マイアミに向ったのは、一月に入ってからかなり日が経ってからであった。彼女が出発するや否や、アーネストもわざと忙がしように仕事にかこつけニューヨークに旅立った。彼等がマイアミで落ち合った時、彼は彼女をステークハウスにボクサーのトム・ヒーニーを付添わせて連れていった。その後彼等は同じ北に向う列車に乗り、途中で別れてそれぞれの目的地へ向った」<sup>5)</sup> のである。

それから二ヶ月後、ヘミングウェイは北米新聞連盟の、そしてマーサは『コリアーズ』の報道記者としてマドリッドの、あるホテルの食堂で再び顔を合わせることになる。その時のヘミングウェイの言葉が誇り高きマーサを怒らせた最初のものであった。「君がここに来るのは知っていたよ、ドクター……君が来れるように手配しておいたんだ」<sup>6)</sup> しかし、実際殆ど何も彼はしていなかったのである。ここマドリッドでは彼女は自分を頼る

以外にはないだろうという読みから、それ故に彼女を自分の支配の下に置こうという、いつもながらのヘミングウェイの姿勢がここにみられるというべきだろう。そして事はヘミングウェイの思惑通りに運び、マーサは間もなくアーネストの mistress を演じるようになる。彼等の滞在していたホテル・フロリダが多くの砲弾を受ける最中、「地下のシェルターに避難する人々の中に、アーネストとマーサの相たづさえた姿が多くの人によって目撃された」<sup>7)</sup> ので、彼等の仲は公然の秘密となったのである。

さて、ヘミングウェイとマーサが親密になるにつれ、そしてポーリンとの結婚の終末が近づいてくるように感じるにつれて、ヘミングウェイは一気に決断する難しさを感じるようになった。考えてみるとポーリンは彼の作品に対しては優れた批評家だったし、彼女はヘミングウェイの子供を二人生んだ上、彼の幸せのために献身的に努めてきた。それに対してマーサは不可解であった。彼女の文学上の野心もその一つだった。ヘミングウェイは彼女に書き方 (how to write) を教えていたが——マーサはそれを否定しているが、それは事実と思われる——そのことも又マーサを妻とする場合にはヘミングウェイにとってマイナスに作用したかも知れない。そのあたりが、『第五列』の第二幕第二場の主人公フィリップ (Philip) と売春婦アニータ (Anita) ——この女性は『誰が為に鐘は鳴る』のピラー (Pilar) の役割を思わせる——との会話にヘミングウェイのマーサに関するアンビバレンスとして表明されている。

アニータ まああなた本当にすてきね。いい？ あの大きなブロンドと間違いをしちゃ駄目よ。

フィリップ ねえ、アニータ。僕はしそうなんだよ。それが大問題なんだ。僕は途方もなく大きな間違いをしそうなんだよ。

……

アニータ 彼女はあなたに何を望んでいるの？ あなたが花を摘むように男をつまむのよ。男がほしいんじゃないの。ただ、彼女の部屋に入れるために摘むのよ。それにあなたが大きいから好きだけよ。私はあなたが小人でも好

きだけど。

(ANITA. Oh, you sweet all right. Listen, you don't want make mistake now with that big blonde.

PHILIP. You know, Anita, I'm afraid I do. I'm afraid that's the whole trouble. I want to make an absolutely colossal mistake.

.....

ANITA. What she want with you? She take a man just like you pick a flowers. She don't want. She just pick to put in her room. She just like you because you big, too. Listen. I like you if you was a dwarf. -p. 43)<sup>8)</sup>

ここには明らかにマーサの心を図りかねているヘミングウェイの内面の一部が吐露されている。とはいえやはり女の髪の毛に引かれる巨象さながらのフィリップ・ヘミングウェイがここに居る。

アニータ いいこと。あの大きなブロンドがあなたを狂わしているのよ。じき、まずいことをしたと思うわよ。血とペンキみたいに違っているのよ。同じに見えるけど、血はペンキにはなれないよ。そうよ、身体にペンキを入れなさいよ。血のかわりに何になる？ アメリカ女よ。

フィリップ そいつは彼女にはひどすぎるよ、アニータ。彼女がなまけもので、わがままで、どちらかというと抜けていてひどく出世ばかり考えているとしても、それでも彼女はすごくきれいで、とても気安くて、ひどくチャーミングで無邪気なんだ——そして極めて勇敢なんだ。

(ANITA. Listen, that big blonde make you crazy already. This soon you can't think good. Is no more the same as you as blood and paint. Is look the same. Can a blood Can a paint. All right. Put the paint in the body, instead of blood. What you get? American woman.

PHILIP You're unjust to har, Anita. Granted she's lazy and spoiled, and rather stupid, and enormously on the make. Still she's very beautiful, very friendly, and very charming and rather

innocent—and quite brave. \_pp43-44)

これは当時のヘミングウェイの表側からのマーサ観をあらわしている。だが裏側のヘミングウェイはこれに対しアニータに疑心を語らせている。

アニータ きれいだって？ 終っちまえばきれいだって何さ。あんたがどうするか知ってるよ。人なつっこいだって？ そいつは扱いにくくもなっていくからね。そうさ、チャーミングなんて兎をにらんだ蛇みたいなもんさ。無邪気だって？ 笑わせるね。有邪気なのがわかるまでのものよ。勇敢だって？ 勇敢だって？ まだ私の腹の中に笑う元気が残っていればまだ笑うだけのものよ。勇敢だって？ わかった。笑ってやるよ。ホホホ。無知と勇敢の区別がつかないなんて、この戦争の間中何してきたのさ。勇敢ねぇ。私のこの……。

(ANITA. Hokay. Beautiful? What you want with beautiful when you're through? I know you. Friendly? Hokay; is friendly can be unfriendly. Charming? Yes. Is a charming like the snake with rabbits. Innocent? You. make me laugh. Ha, ha,ha, Is a innocent until a prove the guilty. Brave? Brave? You make me laugh again if I have any laugh left in my belly. Brave? All right. I laugh. Ho, ho, ho. What you do all the time this war you can't tell a ignorance from a brave? Brave? My this. \_p. 44)

しかし最後の切り札はマーサの若い肉体である。そしてその若い肉体を自分のものにし続けるためにはどこか安全なところが必然的に要求されるのである。

フィリップ……僕は君と結婚して、どこかへ行って、こんなことから逃れたいんだ。そんなことを言ったかい？ 僕がそんなことを言うのを聞いたかい？ ドロシー まあ、あなた、そうしましょう。

フィリップ いや駄目だ。夜寝ている時でさえ、だめなことがわかるんだ。だけれどそうしたいよ。ああ、君が好きだ。いまいまい、こん畜生、君が好き

だ。君の体は世界一すばらしいよ。……

ドロシー ええでも私の身体のことば嘘よ。まあ普通の身体よ。だけどそう言って下さるのは嬉しいわ。

(PHILIP.……)

I'd like to marry you, and go away, and get out of all this. Did I say it just like that? Did you hear me say it?

DOROTHY. Well, darling, we will.

PHILIP. No, we won't. Even lying in the night I know we won't. But I like to say it. Oh, I love you. Goddamn it, goddamn it, I love you. And you've got the loveliest damn body in the world. And I adore you, too. Did you hear me say that?

DOROTHY. Yes, my sweet, but it's not true about my body. It's just an all right body, but I like to hear you say it. (P. 58)

マーサより豊富な性の経験を持ち、女の身体には詳しいと思われるヘミングウェイにとって、戦闘の危険の中に身を投げながら、それにも拘らずその緊張を癒すのは悦楽とアルコールであったろう。一方マーサはまだ自分の才能を信じ、どちらかといえば性のよろこびよりも仕事への情熱がまさっていたに違いない。彼女の肉体はヘミングウェイを喜ばせるための「商品」(commodity, Act3, Scene 4)として役立ったに過ぎなかった面もある。だからヘミングウェイはマーサに対してその「商品」という言葉を浴びせて彼女を怒らせる演出をするが、それには一面の真理も存在するといえるであろう。この戯曲の最後の場面では自分の任務の遂行のためらしく、ドロシーと別れるための演技として彼女に悪態をつくフィリップだが、これは実際のヘミングウェイとマーサの関係とは異っている。作品の意図のために行われたこの結末は説得力に乏しく、不透明さを感じないわけにはいかない。ケネス・リンは「愛の研究としてはこの劇は自己発見の苦しい課題を提供した。一方政治の研究としては自分勝手に自己欺瞞であった」<sup>9)</sup>と述べている。ヘミングウェイの政治姿勢は本論の主旨ではな

いが、あとで少し触れることになる。しかし、この Lynn の批評は、この戯曲ではやや曖昧さが残るヘミングウェイの政治的態度を妥当に批判したものである。

## II

『誰が為に鐘は鳴る』(*For Whom the Bell Tolls*, 1940) のヒロイン、マリア (Maria) はその性格は『第五列』のドロシーとは違って、それ故にマーサとはやや異なっている。いわばマーサのヘミングウェイにとっては好ましい部分を拡大しているともいえるのだが、外観に関してはマーサの北歐的特徴をそなえて、「彼女の皮膚と目は同じ金褐色であり、頬骨は高く、楽しげな目をしており、素直な口にふっくらとした唇がついていた。彼女の髪は小麦畑の金がね色をしていた」(Her skin and her eyes were the same golden tawny brown. She had high cheekbones, merry eyes and straight mouth with full lips. Her hair was the golden brown of a grain field. —p.25)<sup>10)</sup>と述べ、更に「君は可愛らしい顔と美しい身体をしているね。背が高く軽やかで、皮膚は滑らかで黄金色だし、誰もが僕からさらってゆきそうだ」(thou hast a lovely face and a beautiful body, long and light, and thy skin is smooth and the color of burnt gold and everyone will try to take thee from me. —p. 324) という描写は、ヘミングウェイの気持を含めた、まさにマーサのものであろう。

さて、『誰が為に』の創作のヒントになったものは何であったろうか。特にマリアという女性はどうのようにしてこの作品の中に位置づけられるのか。それはヘミングウェイが、「フランシス・マコーマーの短い幸せな生涯」の中で、マコーマーの妻マーゴットが狩猟ガイドのウイルソンと不義を犯す場面を、作者が自身のガイドのフィリップ・パーシバルから聞いた話からヒントをえて、巧みな物語に仕上げたように、この『誰が為に』の中で、マリアに対するファシストによる輪姦は、ヘミングウェイがスペイン内乱の最中に聞いた実話から得たものであった。ここにも彼の



storytelling の才能が光るのである。それは彼が負傷した友人をバルセロナの北のマタロという港町に見舞った時、その病院で出会ったマリア (Maria)——ヘミングウェイはこの名前をそのまま作品に借用した。そしてこの名前自身の中にpureな響きがある——という、穏やかで勤勉な看護婦の痛ましい経験であった。彼女はこの内乱の勃発直後、作品中のマリアと同じ憂き目に合っていたのだが、それにもかかわらず、この病院では「晴朗の化身」(soul of serenity)<sup>11)</sup>と呼ばれている女性だったのである。ヘミングウェイは、この看護婦マリアの体験とマーサの外観を合体させてここに fictional *Maria* をつくりあげることによって、彼のこのスペイン内乱を舞台にした作品の創作意欲に一層のモメンタムを生じさせたといえるであろう。

ヘミングウェイが『誰が為に』を書いていた1939年から1940年にかけて、彼とマーサとの関係はおおむね順調だった。彼等の住所はキューバのサン・フランシスコ・デパウラ村のフィンカ・ビヒアだった。だが、彼等はアイダホ州・サンバレー (Sun Valley) などに出かけたりして狩猟などを楽しんだりもした。新しい住居と新しい女性を得て、ヘミングウェイはこの『誰が為に』の創作に思いの外興が乗っていた。そのためにこの小説はどんどん長くなっていた。その間マーサは『コリアーズ』誌の取材のためにフィンランドに出かけたりした。彼女がこの戦況取材からフィンカ・ビヒアに帰ってきたのは1940年の1月のことだったが、その後も長くここに身を落着けることもなく、ニューヨークやセントルイスに出向いてヘミングウェイを一人にすることも多かった。そのため、ヘミングウェイは午前中猛烈に仕事に熱中する反面、午後から夜にかけては、種々の気晴らしや酒に入りびたることも多かった。一方マーサは次第にこの酒と、彼の不浄さが我慢できないものとなってくるのである。しかし、ヘミングウェイはスペイン時代にマーサと過した戦場での甘い思い出が圧倒的な推進力となってこの小説の筆を運ばせていた。マーサが留守勝ちだったこともかえってマーサの面影をマリアに投影するのに役立ったかも知れない。三日

と二晩の間70時間内での二日目の夜、ゲリラの山寨の robe bed の中でマリアがジョーダンに甘える言葉は、マーサのマドリッドのホテル、フロリダでの語りかけの一部かも知れない。

「あたし、あなたのできるだけいい奥さんになるわ」とマリアは言った。「あなたの奥さんに十分ふさわしくないことはわかっているけど、それを補うよう努力するわ。マドリッドに住めるといいけど。だけど外のところに住まなくちゃならないのなら、それでもいいわ。どこにも住まないであなたと一緒に行くことができるのなら、その方がいいわ。もしあなたの国へ行くのなら、その大部分のイギリス人のように英語を話せるように勉強するわ。みんなのやり方もなって、みんながするように、わたしもするわ」

( 'I will make thee as good a wife as I can,' Maria said. 'Clearly I am not well trained but I will try to make up for that. If we live in Madrid; good. If we must live in any other place; good. If we live now here and I can go with thee; better. If we go to thy country I will learn to talk *Inglés* like the most *Inglés* that there is. I will study all their manners and as thy do so will I do.' \_p. 328)

この中にはヘミングウェイの理想的女性像が示されていることも事実であろう。しかしそれはともあれ、このような素直な態度を示されてジョーダンは戦場という緊張の中、そしてたえずヘミングウェイの世界の基底に横たわる「ナーダ」(Nada)と共に官能の世界に埋没する。「……しっかりと抱き、しっかりと抱かれ、孤独で、うつろをつくりだす体の線、幸福感が生まれ、若く、情愛のこもった、暖かくなめらかなのに何か空ろで、胸が疼くようで、しっかりと抱き合った孤独」(…… closely holding, closely held, lonely, hollow-making with contours, happy-making, young and loving and now all warmly smooth with a hollowing, chest-aching, tight-held loneliness. \_p. 70)

これは“Homage to Switzerland”ならぬ“Homage to Death”への傾

斜の中でのヘミングウェイの中年の恋の有りようであろう。そしてよく引用される「今」(now)と「一つ」(one)との官能結合がここでは支配的となる。その有名なくだりを引用しておこう。

そのまま二人は一つになり、いまは見えないが時計の針の進むにつれてもう何も自分にも相手にも起らないことを知った。これ以上のことは起り得ないし、これがすべてで、永遠で、かつてあったことで、今あることで、先で起るすべてであることを知った。これは予想しなかったこと、それを彼等は味わっているのだった。彼等は今を、そして昔を、そして永遠を、そして今を、そして今を、そして今を味わっているのだった。……今行っている、今昇っている、今すべっている、今去っている、今廻っている、今舞上がっている、今去っている、ずっと今だ。どこまでも今だ、一つだ、一つと一つが一つだ、一つだ、一つだ、一つだ、一つだ、そしてまだ一つだ、まだ一つだ……」(Then they were together so that as the hand on the watch moved, unseen now, they knew that nothing could ever happen to the one that did not happen to the other, that no other thing could happen more than this; that this was all and always; this was what had been and now and whatever was to come. This, that they were not to have, they were having. They were having now and before and always and now and now and now, ... going now, rising now, sailing now, leaving now, wheeling now, soaring now, away now, all the way now, all of all the way now; one and one and one is one (italics mine), is one, is one, is one, is still one, is still one, -pp. 356-357)

以上の如くエクスタシーの思い出に耽りながらも、ヘミングウェイはマーサが今までの二人の妻以上に手剛い存在であることに気付き始めていた。彼は『誰が為に』の中で傑出したキャラクターを創造しているゲリラの親分パブロ(Pablo)の女房ピラー(Pilar)に次のように言わせている。「いいかい、別びんさん。あたしはお前を愛しているんだよ。だけどお前はこのイギリス人のものなんだよ。あたしは変な意味で言うんじゃないけど、

女というものは男のためにつくられたものなんだよ」(Listen, *guapa*, I love thee and he can have thee. I am no *tortillera* bnt a woman made for men. .p. 150)

ここにはマーサに向けてのヘミングウェイの男女力学が巧妙に書き込まれている。ただし、ピラーが亭主のパブロに対してこのような関係にあるというかといえば、話は別である。そこには出会いから数十年後の男女(夫婦)の状態がくしくも描かれているのだ。ピラーがヘミングウェイの母グレイスの *gypsy version* とする<sup>12)</sup>ケネス・リンの言質からすれば、彼の母に対する子としての潜在的憧憬と女一般に対する抗争はここにも存在しているといえよう。

### III

ここで本論の主旨から少し離れることになるが、今考察中の『第五列』と『誰が為に』の理解の上で重要である男性主人公の、即ちヘミングウェイの行動の動機について触れておきたい。

彼が北米新聞連盟の報道依頼に喜んで応じたことは既に述べたが、それにはこの内乱が彼の愛する国スペインに起ったこと、重大な関係があった。彼が味方した共和政府は共産党の指導下にあり、旧ソ連の指導のもとに動いていた。「嘗てはその時代の最大の問題を彼の作品の中で取扱わないために左翼陣営の非難の標的であったが、今やヘミングウェイこそ、左翼に利用されるままになった間抜け野郎だ<sup>3)</sup>」というのがドス・パソス(Dos Passos)の見解でもあった。しかしヘミングウェイは体質的に共産主義にはそぐわない人間であり、当時の妻ポーリンもカトリック信者だったので共和政府側には反対していた。それ故結局彼の政治的立場は反ファシストであって、容共産主義ではなかった。『誰が為に』の中でマリアは共産主義者かという問いに対し、「いいえ、私は反ファシストよ」(No, I am an anti-fascist. .p. 65)と答えている。そして自分は共和党側に十年間味方しており、彼女の父は市長だったが二十年間共和党だったという。ここに

は共産党と共和党の違いをはっきりさせようとする作者の意図が読みとれる。ヘミングウェイはマドリッドにいた1937年と1938年時においては、まだ彼の政治的信念は不明確だったと言えよう。次の独白はその事実を物語る。

では彼の政治的意見はどうだ？ 今のところ何も持っていない、と彼は心の中で思った。しかし他の誰にも言ってはならぬ、と彼は思った。決してそれを認めてはならない。それで戦争が終わったら何をするのか？ 国へ帰って前のようにスペイン語を教え、生計を立てるのだ。そして真実の本を書くのだ。きっとそうしよう。それはきっと手易いことだ、と彼は言った。(What were his politics then? He had none now, he told himself. But do not tell anyone else that, he thought. Don't ever admit that. And what are you going to do afterwards? I am going back and earn my living teaching Spanish as before, and I am going to write a true book. I'll bet, he said. I'll bet that will be easy. -p. 158)

ヘミングウェイにとって「この戦争で知るようになったことはそう単純ではなかった」(The things he had come to know in this war were not so simple. -p. 283) のである。即ち、アメリカやイギリス政府はこの内乱に対して傍観的態度をとった。ファシズムは言うまでもなく警戒すべきであったが、それと同時に共産主義に対しても大きな危惧が当然存在していたからである。ヘミングウェイがスペイン内乱のためにドス・パススやリリアン・ヘルマン (Lillian Hellman) と共にひろく国民に支援を求めるため1937年北米作家会議で行った演説と、その数年後の上記のモノローグを比較すれば彼のこの内乱に対する認識の変化と度合いを我々は知ることができる。

作家の問題は〔と彼は話した〕変わりません。彼自身は変わりますが、彼の問題は不変です。それはいつも如何に真実を書くか、そして真実なるものを見つけ

たら、それが読者の経験の一部となるように如何に表現するかということです……  
真にすぐれた作家なら、彼等が耐えられる現存の政治体制のほとんど如何なる  
体制のもとでもいつも報われるのです。すぐれた作家を生むことのできない体  
制はただ一つあります。それはファシズムです。というのはファシズムはゴロ  
ツキによって語られる嘘いつわりであるからです。嘘を言わない作家は、ファ  
シズムのもとでは生きて働くことはできません。<sup>14)</sup>

なる程ヘミングウェイ張りのパンチのきいた文である。聴衆の大拍手を  
受けたのも無理もない。さて彼のいう「真にすぐれた作家なら、現存する  
殆んど如何なる体制でも報われる」とした中に共産主義体制が入っていた  
かどうかは想像し難いけれども、少くとも1937年においてヘミングウェ  
イはこの政治体制については深く知り、且つ考え得なかったのではないか  
と思われる。それは又アメリカ国民一般についてもいえることであろう。

『誰が為に』の作品そのものについての批評で特に興味あるものはスベ  
インの小説家アルツロ・バレア (Arturo Barea) によるものであろう。彼  
は内乱時ヘミングウェイと顔見知りの間柄であったが、次の五つの点でス  
페인人という立場からこの作品への疑問をなげかけている。その一つは、  
この作品の舞台となっているオート・カスティルの百姓達が自分達のリー  
ダーとして「ばくろうを男に持つアンダルシア地方のジブシー女」を受入  
れることはあり得なかったろう、ということであり、第二には「カスティ  
ルの村人たちはパブロのファシスト達に対する組織的虐殺には決して組し  
なかったであろう」し、第三には、レイプの場面で「スペイン人にとって  
まだ暖く他の男の液の残る女の体を抱くことは不可能だ」ということ、第  
四に、マリアが相手に会ったその日の晩に外国人のベッドに入れてくれと  
頼み、しかもゲリラグループの敬愛を維持することがあり得ようか、とい  
うことであり、そして最後にヘミングウェイはオリジナルなスペイン語を  
伝えるために「わざとらしい英語を創り出している。」という。<sup>15)</sup> 又、ケ  
ネス・リンは、この作品の love story の奇妙さと、ジョーダンの死への

obsession の異状さを特に問題にしている。<sup>16)</sup> 今一人のヘミングウェイ研究者ジェフリー・メイヤーズ (Jeffrey Meyers) は上記パレアの提出した問題点につき次のような反論を述べている。筆者もメイヤーズの解説を支持したいのでここに紹介する。

もし彼等が最も有能な軍事指導者であれば彼等のリーダーとして受入れたかも知れない。戦時中の暴力や憎悪は、それ以外には方法がなかったであろう残忍な虐殺ということに至ることも十分あり得たであろう。レイプ中にかもしたされる荒々しい感情は湿った女性 (moist females) についての嫌な気持を払い去るに十分であろう。マリアがジョーダンに対して性的なイニシヤティブをとることは考えられないが、彼女はレイプによって気も錯乱したし、ジョーダンと寝るようにピラーにけしかけられている。そして彼女の行動はグループの敬愛よりは敵意を生んでいる。更にはヘミングウェイは厳密にリアリスティックな love story よりもむしろロマン度の高いものを書いているのである。最後に彼はスペイン語を翻訳しようとしているのではなくて、古風で、詩的で、高尚に聞こえる英語版を提供しているのである。<sup>17)</sup>

さきに述べたリンのこの作品に対する批評について、その第一点は上記のこのメイヤーズの論駁に筆者は賛同すると同時に、第二の点についても、第一点と同様そのロマンス性と、当時ファシズムが不気味に台頭し、それに対する counter-act の感情がアメリカ国民の意識の中に充満し始めた時期に、ジョーダンのような self-sacrifice の英雄的行為に大衆が憧れを抱いたことは十分に納得のいくところである。その証拠にこの小説は空前のベストセラーとなっている。たしかに主人公ジョーダンの生き方は『武器よさらば』のフレデリック・ヘンリーの生き方とは正反対である。しかし、ジョーダンの生き様は、ヘミングウェイの来し方から体得した方向とも言えるのである。

勿論ジョーダンの中にフレデリック的なものが存在しないわけではない。彼も死はやはり恐いのだ。「彼女 (マリア) が彼の決意をぐらつかせ

るということではなかったが、自分は死なない方がずっといい。彼は英雄や殉教者の最後を喜んで放棄したかった。どこの橋であろうと、モルモピレーの戦を演じたり、ホラチウスだの、堤防に指を突っこんだオランダの少年だのになりたくはなかった。そうだ、おれはマリアとしばらく一緒にいたいんだ。それが本音なんだ。彼女と一緒にいつまでも長い間過したいんだ」(So far she had not affected his resolution but he would much prefer not to die. He would abandon a hero's or martyr's end gladly. He did not want to make a Thermopylae, nor be Horatius at any bridge, nor be the Dutch boy with his finger in that dyke, No. He would like to spend some time with Maria. That was the simplest expression of it. He would like to spend a long, long time with her. .p. 159) というジョーダンの言葉は戦場を捨て、恋人と共にスイスに逃避行をするフレデリックに共通するものであり、それ故にまたヘミングウェイに対する最近の単語 androgyny (両性具有) が浮かんでくるのだが、しかし彼が自らの中にある feminine なものをあくまでも克服しようとする意志は、ジョーダンと共に橋に爆薬を仕掛けに赴くアンセルモ (Anselmo) の口を借りて祈りとなって表れている。「神様、明日は男らしく最後を全うされますようお願い下さえまし。どうぞ神様、その日の重大さがはっきりわかりますようにお助け下さえまし。どうぞ神様、恐ろしい時がまいりましても逃げ出さないように私の足をしっかり見張って下さえまし。どうぞ神様、明日の戦いの日に男として立派に振舞えますようにお助け下さえまし」(Help me, O Lord, to-morrow to comport myself as a man should in his last hours. Help me, O Lord, to understand clearly the needs of the day. Help me, O Lord, to dominate the movement of my legs that I should not run when the bad moment comes. Help me, O Lord, to comport myself as a man to-morrow in the day of battle. .p. 309) 究極的には、勇気と臆病の葛藤は『誰が為に』に於てようやくはっきりと勇気が勝利している。ここには「フランシス・マコーマー」のあの最後のみじめさは消えてい



る。

#### IV

マーサとヘミングウェイとの仲は1936年の12月のキー・ウェストでの出会いから、1945年12月の離婚まで九年間であったが、その内正式な婚姻期間は五年である。二人の関係は、『第五列』に見られる不安時代から『誰が為に』の蜜月時代を経て、1943年正式な結婚後二年を過ぎるあたりから次第にあやしくなってきた。ヘミングウェイは後に ‘bitch’ の代表格のごとく、マーサと母グレイスを述べることになるが、マーサの方に一方的に非があるのではなく、さきに述べたピラーの台詞の如く、「女は男のためにあるもの」的態度が彼の他の妻達よりも突出して「知的で、有能で、野心家」<sup>18)</sup>のマーサには我慢できなかったのであろう。一方マーサのヘミングウェイに対する気持も必ずしも彼の celebrity に対するものばかりではなかったのである。自分の仕事のためもあって留守勝ちだったマーサは、1943年1月仕事先からキューバに帰る途中嵐に合って足留めされたこともあって、ついでに母親のところへ立寄らせて欲しいという手紙をアーネストに書いている。その中で、アーネストと自分の母がこの世の中で最も愛する人であり、もし自分の留守の間にアーネストに病気か事故でもしものことがあれば自分も死んでしまうだろう。自分達の生活は素晴らしいものであり、自分はすてきな家とキューバの陽光をとて有難く思っている。今年はいい年ではなかったけれども、又自分はカトリック信者ではないが、彼と彼の子供達のために大聖堂に出かけてキャンドルを灯してきました。恐らくキャンドルがあなた達を守ってくれるでしょうという主旨のことを書き送っている。<sup>19)</sup>又同じ1943年ニューヨークからの手紙では二人の危機を予感するかの如く、「どうか私がどんなにあなたを愛しているかわかって下さい。……あなたは私よりもはるかに立派な人です。……しかし女として、あなたの女として、(私は) 悲しいのです。決定的なことはやってこないわね。これはただの小旅行で私達は愛の巣へその小旅行

から帰っているところなのね。……そしてそれから本と一緒に書きましょう。一緒に秋を見て、穀物畑を歩きまわって雉を射ちましょうよ」<sup>20)</sup>と書いている。

ヘミングウェイは女のいない生活には彼の一短篇集とは違って慣れていないので、マーサがいない時には彼女を恋しがり、帰ってくると彼女を非難した。1943年のクリスマス、マーサがイギリスに行って二ヶ月後、彼は自分が如何にマーサを愛しているかを友人に書き送ったりしている。彼には今はマーティー・マーサの愛稱一があるだけで他の誰もいなかった。彼女に何か起れば今度は自分がどうなるかわからない、とまで言った。その一年半後、二人の決別が訪れた時、彼は Sara Murphy に皮肉をこめて「私はベッドの妻が欲しいんだ。人気雑誌の中の妻ではない」<sup>21)</sup>と述べており、実のところキューバでは他の女に心を奪われることはなかったようである。

彼等二人はこのように離れている時には恋しがりはしたが一緒にの生活は難しかったようだ。二人の喧嘩が重なればマーサはそれだけ多く旅をした。マーサにとって我慢ならないのはヘミングウェイを取巻く粗雑な、へつらい連中だった。それがマーサの家庭生活を破壊し彼女の神経にさわった。『誰が為に』の印税その他により多額の税金を払わされるはめにもなり、ヘミングウェイは破産するのではないかと心配したりもした。マーサは自分のためには何も買ってくれないと怒り、一方ヘミングウェイの方はマーサが一ペニーまでにもうるさいと不平を言った。批判的性格を持ち、舌の鋭いマーサは彼の不潔さ、嘘言、飲酒、粗野、そしてくさい猫たちを容赦なくこきおろすようになった。

彼等の結婚生活で最も深刻な問題はヘミングウェイの深酒だった。現在アメリカ作家の多く——シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis), ユージン・オニール (Eugene O'Neill), フィッツジェラルド (Fitzgerald), フォークナー (Faulkner), スタインベック (Steinbeck) がそうであるように、彼もアルコールに悩まされる。これら作家連中と同じく、アルコールは書く

ことの重圧からの一時的逃避だったに違いない。ヘミングウェイは1935年8月、彼の作品の翻訳者である旧ソビエトの文芸評論家イヴァン・カシキンに次のように飲酒についての一家言を述べている。

きみは飲まないのかい？ どうも君は酒のことを軽蔑している口振りだね。ぼくは15の時から飲んでいる。一日頭を酷使して働いて、翌日もまた同じ仕事をしなければならぬ時、気分を転換して新しいアイデアを生み出すにはウィスキーが一番だ。寒さに凍えたり、濡れそぼったりした時、ほかの何がこんな体で暖めてくれる？ 攻撃の前、誰がどんな言葉を並べたところで、ラムが与えてくれる慰めにかないはしない。夜、夕食はなくても我慢する。しかし一杯の赤ワインはなくてはならないのだ。酒がよくないのは、ただ書き物をするときと喧嘩のときだけだ。この時ばかりは素面しよまでないと駄目だ。しかし射撃の場合は、ぼくは飲んでいたほうが調子がいい。現代生活はしばしば機械的抑圧であり、酒はそれに対する唯一の機械的解毒剤しよくざいなのだ。ぼくの本が売れてなにがしかの金ができたら知らせてくれ。すぐモスクワに行って酒のわかる人と語らって、機械的抑圧廃絶のために印税を全部飲んでしまおう。<sup>22)</sup>

しかしこの酒がさきに述べた作家達と同じようにヘミングウェイの死を早めることを彼自身は知っていたかどうか。彼のことからフィッツジェラルドのこともあって多分知っていたであろうが、これはそんなに易々と断ち切れるものではなかった。さて、マーサのヘミングウェイに対する態度の変化は、彼女の『誰が為に』に対する評価の変化と一致する。ヘミングウェイが彼自身認めていたすぐれた文芸批評眼の持主であるポーリンにこの作品の批評を求めて拒否され、当初マーサの意見を求めた時、「面白く、すばらしい、生々とした、心を湧き立たせる」<sup>23)</sup>ものとしてこの本を賞賛し、彼の努力を称えながらも、数年後になると、自分は「ヘミングウェイには批判的であったし、意識的に彼の感情を害してきた。……実のところこの本は大嫌いです……」<sup>24)</sup>と述べているから、人が感情に如何に左右され易いかわかるというものである。

こゝでどちらかという父親ヘミングウェイに辛口の personal memoir を書いた三男グレゴリーのマーサに関する部分を引用してみよう。

実情はこんなところにあったのだ。マーティはいつも妻としての仕事を怠り、アーネストを蔑ろにし、遂には彼を捨てたひどく野心的な女として描かれてきた。これはアーネストの彼女と別れてから後、友人達に出した手紙に基いてカールロス・ベーカーがヘミングウェイ伝に書いているからだ。しかし事実は異なっている。マーティは決して自分から去ったのではない。彼女はキューバのあの家から追い出されたのだ。パパの誇大妄想のあの大きな反動によって追い出されたのだ。マーティを家族の中で作家に仕上げるという彼の考えは失敗したが、それは彼女に才能がなかったからではなく、パパがナンバーワンでありたいという強い欲求のためだったのだ。

.....

ある時突然彼は彼女に向かって言うのを聞いたことがある。「それじゃ、俺はもう書けないと思っているんだな。よし書いてみせてやる。思いあがったピッチめ。おれの作品はな、うじ虫がお前の身体を食いつぶした後でも長く読まれ続けるだろうぜ」多分そうだろう。しかし何たって、これが愛する者に向かって言う言葉だろうか。

後になって彼等の決裂がそう単純なものでないことがわかった。パパによると、彼等のいさかいの根本には性的問題があったそうだ。それは医者に相談すれば容易に解決できたかも知れなかったろうが、父は彼の女達にはそういう直接的な方法をとろうとしなかった。彼はただマーティを苦しめたのであり、彼が遂に彼女の彼に対する愛のすべてを破壊して、そして彼女が彼のもとを去った時、彼は彼女が自分を捨てたと主張したのだった。<sup>25)</sup>

この性的問題については、ヘミングウェイ自身は何も語っていないが、マーサが第四番目の妻メアリー (Mary) などと違って「私の肉体で私はあなたをあがめます」(with my body I thee worship)<sup>26)</sup> というタイプの女でなかったことは事実である。何故ならマーサ自身1982年 *Hemingway Women* の著者 Bernice Kert のインタビューでその言葉を使って答えて

いるからである。グレゴリーも述べているように、ヘミングウェイ自身、そういう彼女をやさしく開かせる努力はしなかったようだ。マーサの気持ちをどの程度考えたかは疑問である。そういうわけで二人の間の交わりが二人の争いを和らげる役目を果たさなかったであろう。しかしグレゴリーの観点は、自分を生んだ母 Pauline を離婚し、自分の問題でアーネストとポーリンの口論で母の死を早めたと考える潜在的拒絶反応でもあったと考えられる。

二人の決定的な決別ともいえるものは、1944年の5月に起った。二人は共に第二次大戦の報道のためにイギリスに向った。飛行機には男だけしか乗せないんだ、といつわってマーサを船で大西洋を横断させたヘミングウェイは、一足先にロンドンに着いて知合いの仲間達と午前3時まで飲み、灯火管制の敷かれている街を車でホテルに帰る途中、スチール製の給水タンクにぶつかって、アーネストの頭がフロントガラスを粉々に砕いてしまった。彼は57針も縫う大怪我をし、ロンドンクリニックに入院した。マーサが船でイギリスに着いてから、この話を聞いた時、船中ずっとアーネストの自分に対する仕打ちを十分考える時間があり、だんだんアーネストに我慢出来なくなっていたこともあってか、彼に会いに病院にいった時、繃帯がターバンのように額を包んでいる彼を彼女は見て吹き出してしまった。ヘミングウェイはひどく心傷を害された。そしてそれがここロンドンでメアリーに会ってから3度目にいきなり、“I don't know you, Mary, ... But I want to marry you.”<sup>27)</sup>という言葉となったのである。

## V

ヘミングウェイが自動車事故で入院している時、マーサの見舞が冷たかったことが、一種投げやりともいえるメアリーへの求婚となったという見方もできよう。ところで第二次大戦中ノルマンディの戦場においてヘミングウェイが『コリアーズ』紙の記者という身分でありながら、兵士にも匹敵する以上の活動をした事実はよく知られているが、1944年8月のパ

り解放後のある日のこと、メアリーが彼の滞在しているリッツホテルをたづねてくると、直ちにその夜アーネストはメアリーをレフトバンク・レストランに連れていった帰り、柔らかい夜の空気の下<sup>もと</sup>、そぞろ歩いてホテルに帰る途中、メアリーに尋ねた。「私のピックルになってくれないだろうか、酸っぱいけれど、ピリッとする？」ヘミングウェイはメアリーに「ピックル」というニックネームを既に用意していたのである。その日彼女はリッツホテルに部屋をとっていたのであるが、ヘミングウェイに従って31号室に入り下着姿で彼のベッドに滑り込んだ。この夜が彼等にとって最初の夜であったかどうかは確証はないが、メアリーの思わせぶりなその夜の描写は、想像力をたくましくさせるに十分である。例によって戦場の激しさをmake upするものとしてヘミングウェイは一層強く女を求めたのであろう。それ以後彼はこの大戦を通じて親友となったラナム大佐(Lanham)の率いる連隊と行動を共にすることが多く、その間11月には連隊の三分の一の死傷者を出したヒュルトゲン・フォレストの戦いなどにも参加し、検問総監部より報道活動逸脱の疑いにより軍法会議にかけられるまでに至る。しかし上記ラナム大佐の証言で釈放されるが、これらの期間中も(11月と12月)毎日のようにメアリーに恋文を書き送っている。ちなみにメアリーは『タイム・ライフ』誌の記者であった。彼女には、『デイリー・メール』誌の記者ノエル・モンクスという夫がいたが、当時彼等の婚姻関係もまた名目だけのものとなっていた。その当時のメアリーへの手紙を引用してみよう。

.....

頭、体、ベッド、心、未来、顔、魂、伴侶であることの確信と信頼、願望、TWH. BWH.あるいはまた THW. BHW. (ここでミスター・スクルービーが起立)<sup>29)</sup>命あるかぎり一緒に暮したいと思ひ.....

.....

最愛のいとしいピックル、きみはあの黄色いベッド・ジャケットを着て、魅力的なかわいい口をしているだろうか。ぼくのすべての船の船首像。自らの欲

望を知っているもの。そのかたわらには、やはり欲望をいまくパートナーが横たわり、ほかには誰もいなくて……きみが好きだ。大好きだ。

ぼくは、きみが望む通りの人間になりたいと思っている。もちろん、きみがきみ自身の立場を守っているのと同じで、ぼく自身の立場をなくしてしまうわけじゃないけれど（こういう言い方はいやらしく聞えるがぼくの真意はわかってもらえると思う）。お願いだから、ぼくがきみの望みどおりの人間になるのに手を貸してほしい。——ぼくはきみのために一頭の馬として走るつもり。——しかし家のなかでは馬でも馬の尻でもなくて、善良、愛情にあふれた、健全な、しかも楽しい夫でありたい。早く君と結婚して一緒にすばらしい生活を送りたい。

きみを愛している。いとしい大事なメアリー。命ある限りきみを愛している。きみに忠実な、アーネスト・ヘミングウェイ。<sup>30)</sup>

このようなダイレクトな表現からしてこの時点でヘミングウェイとメアリーとの親密度は憶測できよう。そして彼が如何にメアリーがそばにいないのをセンチメンタルなまでに恋しがっているか想像がつく。マーサに冷たくされた残滓がくすぶっている感がなくもない。しかしここに間もなく別の女性の出現してメアリーの心に波風を立てることになる。二人が前線からパリのリッツホテルに帰ってみると、たまたまそこには旧知のマリーネ・ディートリッヒ (Marlene Dietrich) が泊っていたのである。「マリーネはアーネストの部屋に下りてきて彼が髭をそっている時彼に向って歌を歌ったりした」<sup>31)</sup>とメアリーは彼女の自伝に書いている。とかくするうちに、ヘミングウェイのもとに集まる飲み仲間や、取巻き連中のことでメアリーとの間に最初のいさかきがあった。ヘミングウェイは初めての一発をメアリーのあごに喰らわせると、メアリーも又彼に平手打ちを返し、彼にまたがって拳で彼の胸をどんとたたきまくった。ヘミングウェイはにたりと彼女を見上げ、君の怒った顔も又満更でもない、ととりつころった。

ヘミングウェイが有名なドイツ女優ディートリッヒと会ったのは、1934

年アフリカのサファリからの帰国の途中、イル・ド・フランス号の中だった。「マレーネ・ディートリッヒがすでに始まっていたディナー・パーティーに加わろうとダイニングサロンに入ってきた時は、ヘミングウェイは他の男達とはまるで違った態度をとった。他の男達はみんな立上って自分の席を譲ろうとしたが、ディートリッヒは自分の席が13番目になることがわかると迷信深く立去ろうとした。アーネストは彼女の前に立ち、自分が14番目になりましょうと恰好よく申し出た。」<sup>32)</sup>さすがにヘミングウェイといふべきであろう。しかしヘミングウェイは自分とディートリッヒが「恋愛関係になったことは一度もなかった」<sup>33)</sup>と言った。いろいろの制約がお互いあって、その気は又お互いにあったかも知れないが事実はヘミングウェイの言う通りのような気がする。

メアリーの人柄については好意的なものが多い。「公的な場では、感じよく物事を行った」<sup>34)</sup>し、コニー (Conie) という彼女の仕事仲間は、「彼女(メアリー)はとても生々としたところがあり、いつも自分の心の中を打明けた。仕事のことで自分は彼女が脅威となることはなかったし、信頼の置けそうな女友達となった。」<sup>35)</sup>と言っている。又メアリーはよきセックス・パートナーでありたいと思った。ラブ・メイキングは彼女には抵抗はなかったし、アーネストが出来ないことを彼女が逆に望むこともなかった。このように容易に相手になってくれることが、マーサの遠慮のない拒否にあった後ではまさにヘミングウェイの望みでもあった。<sup>36)</sup>

さきに述べたディートリッヒや、やがて現れてくるアドリアーア・イヴァンイッチ (Adriana Ivancich) —— *Across the River and Into the Trees* のヒロイン、レナータのモデル——など、ヘミングウェイをめぐる女性はまだ後を断たなかったが、メアリーは、ヘミングウェイのあらゆる感情を理解し、彼を喜ばせるために意識的な努力をした。彼女はのちに、「私は彼がマスターであり、私よりも強く、賢明で、彼が如何に私より大きく、それに対して私が如何に小さいかをたえず思い起した。」<sup>38)</sup>と述べている。



彼女はいわゆる“whipping boy”の役に徹することに決めたのである。これに対しヘミングウェイもこのメアリーを讃えて次のように言っている。「ミス・メアリーは忍耐強い。彼女は又勇敢であり、魅力的で、機智に富み、見るに心地よく、一緒にいて楽しいよき妻である。彼女は又すぐれた女漁夫であり、鳥討ちがうまく、泳ぎもでき、すばらしい料理人であり、ワインの判定もできる。すぐれた庭師で、アマチュアの天文学者で、絵画や政治経済学、スワヒリ語、フランス語、イタリア語の研究生であり、スペイン語で船や家庭をきりもりすることができる<sup>39)</sup>と。これがすべて事実だとすれば彼女は才能に加えてすばらしい努力家だということになる。

1945年3月、ヘミングウェイはキューバに帰ってメアリーとの結婚の準備をした。メアリーへの手紙にもみられるように、よき夫になろうとしたヘミングウェイだった。彼は家や船をメアリーに見せたくてならなかったし、彼女にスポーツを教え、友達を紹介したくてたまらなかった。彼女がやってきて、マーサと正式に離婚すると、翌年メアリーとの結婚手続きが完了した。その後間もなくメアリーは子宮外妊娠のため死線をさまようまでになるが、ヘミングウェイの献身的な介護により一命をとりとめる。1947年には前妻ポーリンが交通事故後遺症の息子パトリックの看護のためキューバにやってきて、メアリーととても仲好く過したのにはアーネストもびっくりしたのである。

ヘミングウェイとメアリーの間はこのようなものだったが、彼の作品の中でメアリーがモデルとして登場するのはさきに述べた『エデンの園』にほんのわずか、ぼんやりと現れる位で彼の妻達の中では最も少なかったといえよう。ちなみに彼の作品の中で最も永遠なる女性として残っているのは、やはりアグネス・キャサリンであり、マーサー・マリアであり、レナーター・アドリアーナである。美しくそしてあこがれのままで終る女性が最も美化され、戦場の恋や思いのままにならない不在がちの女性がそれに続く。しかし作品の中で永遠の名をとどめなかったメアリーは、同時に最もよく夫に仕えた故に現実の世界では最も高き位に昇ったといえるだろう。何故

なら彼女はヘミングウェイの最も名声高き時代に彼と共に生活し、ノーベル文学賞やケネディ大統領の招待などを受けたばかりか、夫の遺産と印税により彼の死後気ままに世界中を旅して、この巨星の最後の妻としての矜持を保ちつつ一生を終えることができたからである。彼女には最初からその計算があったかどうかは知る由もないが、彼女が彼を深く愛し、尊敬し、誠実であったことは疑うべくもない。ヘミングウェイと共に写っている数多くの写真の中のメアリーの眼がそれを雄弁に物語っている。

## VI

『誰が為に鐘は鳴る』(1940)から10年後、『河を渡って木立ちの中へ』(1950)が出版された。その間ヘミングウェイは第二次世界大戦の報道記者として兵士にもまがう活動があり、マーサとの離婚、メアリーとの結婚があった。この『河を渡って』は、この第二次大戦の経験と、彼が若き頃青春の血を燃えたさせた、なつかしい第一次イタリア戦線のダグリアメント河への熱き想いのためにメアリーとイタリアを旅し、その途中出会うことになった19才のイタリア貴族の女性へのあこがれが生んだものである。しかしこの作品は大方の読者にその期待があまりにも大きかったが故に大きな失望もたらされたという。批評家も又読者の反応と同様につ冷たかった。例へば Maxwell Geismer の *Saturday Review of Literature*, 33 (September 9, 1950)<sup>40)</sup>によると、「これは不幸な小説であり、ヘミングウェイの才能と業績を尊敬する者にとっては批評するのに不快感さえする。これはヘミングウェイの最悪の小説であるばかりでなく、彼の以前の作品の中のものすべてのももの総括であり、将来に疑問の影を投げ与える」と言っている。又 Philip Rahv はヘミングウェイが「騒々しい自己憐憫と騒々しい己惚れにとっぷり浸っており、著者とリチャード・キャントウエル大佐の間には芸術的距離は殆んどない」<sup>41)</sup>と述べている。こういう批評のである所以はこれまでのヘミングウェイの作品を被っていた macho 性が全く見られず、死を前にした静穏さ、ある意味では無力感さえ

漂っている気もする内容のためである。その意味でガイスマーの批評も今まで批評家にたえず反駁してきたヘミングウェイに対する仕返しもこめられているとも考えられ、又ラブのものはヘミングウェイの作品成立の状況からすれば決して新しい指摘でも何でも無い。ヘミングウェイは1958年ケッチャムでの高校生たちの質問に答えて次のように言っている。

質問——あなたは小説で自分のこと書くのですか。

答え——作家はほかにもっとよく知ってることがあるのかい？<sup>42)</sup>

この答えはやはりヘミングウェイの書く基本姿勢をずばり表現している。そしてこの『河を渡って』の発表直後より時間を置いた現在、そしてヘミングウェイの全貌が明らかにされていく中で、これをあらためて眺める時、これが彼が50年「生きて、恋して」体得した人生語録であるように思われる。『河を渡って』の中のそういう人生語録をいくつかとりあげてみたい。ヘミングウェイが更によく見えてくるからである。

1. 羊となって百年の寿命を保つよりは、獅子となって一日で死んだ方がまだましです(第六章)。
2. けだし強い男とは、芝居気があって自分のお芝居の人気を煽る男のことだ。おれは劇場のことを考えているんじゃないと彼は思った。劇場のように華やかに芝居をやることだ(第六章)。
3. 「旦那さまは、この市までたいへん人気がございます」  
「有難う。それは大したほめ言葉だ」(第八章)
4. 何というすばらしい娘だろう。とにかくお前はここで何をしているんだ。それは悪いことだ。この娘はおれの最後の、そして唯一の、真実の恋人だ。実に幸運なことだ。お前は実に幸運な奴だ(第九章)

5. 「わしは君をわしの娘にしたい。だが君を所有したいとは思わん」  
「わかってるわ」と娘が言った。「それもわたしがあなたを愛する理由の一つよ」(第九章)
6. 「わたしはあなたに奉仕したいのよ」  
「わかっている。だが君は同時に支配しがっているのだよ。それはちっとも悪いことじゃない。わたちのような人間は、みんなもっている気持だ」(第十二章)。
7. 大佐は彼女を強く抱き寄せ、顔を仰向かせて接吻した。その接吻にもはや絶望のほか何も残らなくなるまで。(第十三章)
8. わしは用心深い人間なんだが運がよくない。ナポレオンは運のいい人間の下につきたがったということだが、たしかにそれは正しい態度だと思う(第三十章)。
9. 紳士たちよ、ほかにどうしようがあるろう。必要なのは服従することだけなのだ(第三十一章)
10. もし君が喧嘩するようなことがあったら、勝たなきゃ駄目だ。勝つということがすべてなのだ。勝ちさえすればわしの旧友のロンメル先生の言葉じゃないが、あとは何とでもごまかしがつく(第四十章)。(原文省略)

これらの語録は、喧嘩を始めたなら勝たねばならぬこと、芝居気を煽って自分を売出すこと、を一方の極としながらも、女との闘いでは結局は服従させられてしまった男のつぶやきが伝わってくる。

## VII

1948年11月、ヘミングウェイはメアリーを伴ってイタリアを旅し、彼が1918年の7月19歳で負傷した Piava River 沿いのフォッサルタ (Fossalta)

を訪れた。12月には彼は二人のイタリア貴族に招待され、鴨射ちに出かけたのである。その時に会ったのが『河を渡って』のヒロイン、レナータ (Lenata) のモデル、アドリアーナ・イヴァンツィッチだった。彼女は貴族の一人ケヒラー (Keehler) を雨の中で待っていたのだが、ヘミングウェイがアメリカから持ってきた豪華なビューイックにヘミングウェイによって pick up された。ヘミングウェイは hunting lodge の kitchen fire のそばでアドリアーナが濡れた髪を乾かしていたのをみていた時、彼女が櫛をお持ちでは、と彼に尋ねた。彼は櫛全体を彼女に渡す代りに、それを半分に折ってその片方のみを彼女に渡したのである。これは二人の結びつきを暗示するヘミングウェイの見事な策略であった。その後ヘミングウェイは『河を渡って』を執筆中も1949年の夏と秋、更にその作品の出版後も、彼女にイタリアで会っており、そして更に1950年の10月から1951年の2月初めまで、アドリアーナは母親のドラ (Dora) と共にキューバのヘミングウェイ家に滞在した。アドリアーナは『河を渡って』のヒロインとなったばかりでなく、その出版後もしばしばヘミングウェイの傍にいて『老人と海』 (*The Old Man and the Sea*) (1952) の執筆の原動力ともなったのである。それは『河を渡って』の一般的不評に対するアドリアーナへの汚名挽回的要素も加わっていたのである。

レナータの身体的特徴はまさしくアドリアーナのものである。ところが『河を渡って』の中の初老の大佐との sexual behavior はヘミングウェイの想像上のものであり、幻想の世界の出来事のように描かれることになる。彼女は「若さに輝き、背は高く大股に歩くのが美しく、風が彼女の髪を乱した。彼女は青白く、殆んどオリーブ色の皮膚をしており、あなたの、否、すべての人の心を乱す横顔をしており、生きた手触りのする彼女の黒髪は肩の上まで垂れ下がっていた」 (shining in her youth and tall striding beauty and the carelessness the wind had made of her hair. She had a pale, almost olive-coloured skin, a profile that could break your, or anyone else's, heart and her dark hair, of an alive texture,

hung down over her shoulders. \_ P. 69)<sup>43)</sup> と、その描写力はまだなかなかのものである。

風はひどく冷たく二人の顔を鞭うったが、毛布の下には風もなく何もなかった。ただ彼の負傷した手が高い峻しい土手を持った大きな川の中の島を探り求めているだけだった。

「それよ」と彼女が言った。

彼はその時彼女にキスをしてその島をさぐり、うまくさぐり当てて、それから見失い、そしてうまくさぐりあてた。よいのか悪いのか、いやそれでよいのだ、と彼は思った。

「可愛い人、わしのとてもいとしい人、お願いだ」と彼は言った。

「だめ、ただ私をしっかり抱いて、その高い所もおさえていて」

The wind was very cold and lashed their faces but under the blanket there was no wind nor nothing; only his ruined hand that searched for the island in the great river with the high steep banks.

'That's it,' she said.

He kissed her then and he searched for the island, finding it and losing it and then finding it for good. For good and for bad, he thought and for good and for all.

'My darling' he said. 'My well beloved. Please.'

'No. Just hold me very tight and hold the high ground, too.' \_p. 131)

この部分がヘミングウェイのアドリアーナとの性の世界への夢の産物であることは、彼が三男グレゴリーにその頃語った言葉と符合する。父親は息子に次のように言っている。「ベッドの中で女性を楽しませる秘訣はな、実に簡単なんだよジグ。女にはお前の小指の三分の一位のものがあるんだ。それはクリトリスというんだが、それは丁度真中にある。お前が女を楽しませたいんなら、自分だけを満足させるのではなく、本当に女を楽しませたいんなら、まずそれをやさしく撫でるんだよ、何回もな

あ。お前が猫を撫でるように、とてもやさしくなあ。……そこは女の性の引き金で、いわば小さなペニスなんだよ。それを知らないとしたら、ベッドで女をたのませようなんてことは忘れたほうがいいよ」<sup>44)</sup> その時ヘミングウェイの頭の中にはアドリアーナが浮かんでいたに違いない。

グレゴリーは更にキューバのフィンカに滞在したアドリアーナと父アーネストについて次のようにのべている。「アドリアーナは魅力のある女性だった。黒い髪と黒い目を持ち、頬骨が高く、面長だが角張ってはいなかった。そして自分の家柄を意識して誇ることもなく微笑んだ。…要するに彼女はパパの根本にある騎士道に合致していた。彼女は貴婦人だったのだ」<sup>45)</sup> そして更に次の文句は、グレゴリーが客観的に眺めたアドリアーナに対するヘミングウェイと、そしてメアリーの姿までも目のあたりにしてくれる。

そのアドリアーナがフィンカ荘に一家の客として無情にも彼女の母に付き添われてきている今、パパは彼女がそばにただで陶酔状態だった。触れるわけでもなく、キスするわけでもなく、共に寝るわけでもないのに。メアリーはこれをどう思ったろう。僕にはわからない。ぼくは決して尋ねなかった。<sup>46)</sup>

アドリアーナがヘミングウェイに対して男としての魅力を感じていたら、彼らの間に関係が生じたことは容易に想像できよう。しかし三十才も年齢が離れている上に、マーサと違っていつもアーネストの傍にあって妻という役割に徹しようと心に決めていたメアリーののためにも、この二人の間には関係が生じなかった。又ヘミングウェイ自身にも自制力も働いたかも知れない。アドリアーナと彼女の母親は、ヘミングウェイ家で絶大なる hospitality にあづかったが、具体的にそれに対する返礼は何もできなかったし、又ある意味では彼を利用して没落しかけた自分の家の復興という気持も特にドラにはあったかも知れない。『河を渡って』のヒロインのモデルがアドリアーナであるという噂がイタリアで広まり、そのため彼女は—

旦那結婚したギリシヤ人の夫に家に軟禁されたりして、不幸な三年間の結婚生活の後、1963年にはドイツ人の伯爵と再婚したが、これもレナータのオブセッションにとりつかれ、深酒に浸るようになり、この二度目の結婚でもうけた二人の息子とも生き別れ、精神異常をきたし、自宅の農場で首吊り自殺を試み、まだ息のあるうちに木から下ろされたが病院でまだ五三才の命を閉じた。ヘミングウェイをめぐる女性の中で、関係を持たなかった彼女だけが自殺したヘミングウェイの後を追うように自殺したのも何か因縁めいた気がしてならない。

## (注)

- 1) Ernest ought to think about the idea of covering the war for NANA. (Carlos Baker: *A Life Story*, p. 296)
- 2) As darkness fell, the lights in the bar were lit. Yet Hemingway still showed no signs of wishing to take leave of his newfound friends. He told them something about the history of Key West and offered to take them on a tour of the island and show them where the swimming was good. On Whitehead Street, meanwhile, Pauline was holding their crayfish dinner and having another drink with their guests, Charles and Lorine Thompson. Finally, she asked Charles to go to Sloppy Joe's and find out what was delaying her husband. At the bar, Hemingway told him to tell Pauline that he wouldn't be home for dinner, but would meet her later at Penna's Garden of Roses. When Thompson reported back to Pauline, she at once wanted to know what Miss Gellhorn looked like, and was distressed to learn that she was young and blond. (Kenneth S. Lynn: *Hemingway*, p. 465)
- 3) it "never occurred to me,"... that "she could be jealous." (ibid., p. 467)
- 4) Most observers agreed that Martha courted Hemingway. (Quoted in Jeffrey Meyers: *Hemingway*, p. 300)
- 5) It was well into January when Martha Gellhorn left by car for Miami on the first leg of her trip back to St. Louis. She had no sooner departed than Ernest left with some deliberate haste on a business trip to New



- York. When they met in Miami, he took her to a restaurant for a steak dinner under the chaperonage of the boxer Tom Heeney. Afterwards they caught the same northbound train, parting company enroute and continuing to their respective destinations. (*A Life story*, p. 299)
- 6) "I knew you'd get here, daughter, ..." because I fixed it so you could." (Lynn: *Hemingway*, p. 468)
- 7) "All kinds of Liaisons were revealed...as people poured from their bedrooms to seek shelter in the basement, among them Ernest and Martha." (*A life Story*, p. 309)
- 8) Ernest Hemingway: *The Fifth Column and Four Stories of the Spanish Civil War*, (Scribner's sons, New York, 1972)
- 9) A study of love, Hemingway's play represented a painful exercise in self-discovery; as a study of politics, it was self-indulgent and self-deceiving. (Lynn: *Hemingway*, p. 473)

## II

- 10) Ernest Hemingway: *For Whom the Bell Tolls* (Jonathan Cape, 1950)
- 11) *A Life Story*, p. 328.
- 12) Lynn: *Hemingway*, p. 489

## III

- 13) Once a target of leftist abuse for not dealing in his fiction with the great issues of the day, Hemingway was now the Left's "fair-haired boy," of whom much was expected, .... (Lynn: *Hemingway*, p. 449)
- 14) A writer's problem [he said] does not change. He himself changes, but his problem remains the same. It is always how to write truly and having found what is true, to project it in such a way that it becomes part of the experience of the person who reads it...Really good writers are always rewarded under almost any existing system of government that they can tolerate. There is only one form of government that cannot produce good writers, and that system is fascism. For fascism is a lie told by bullies. A writer who will not lie cannot live and work under fascism. (*A Life Story*, p. 314)
- 15) "invents an artificial and pompous English" .... (Meyers, *Hemingway*;

*Critical Heritage*, p. 358)

16) Lynn: *Hemingway*, p. 486.

17) Though Barea is a Spaniard, his generalization about the Spanish people are less convincing than Hemingway's. The villagers might have accepted Pilar and Pablo as their leaders, during the unusual conditions of guerrilla war, if they were the most effective military commanders; and the violence and hatred of wartime might well have led to the kind of brutal massacre that would otherwise have been impossible. The violent emotions aroused during rape would be sufficient to dispel fastidious feelings about moist females. It is unlikely that Maria would make sexual overtures to Jordan; but she has been deranged by the rape and then encouraged by Pilar to sleep with Jordan, and her behavior arouses the hostility rather than the adoration of the group. Moreover, Hemingway is clearly writing a highly romanticized rather than a strictly realistic love story. Finally, he does not attempt to translate the Spanish, but provides an English version that will sound archaic, poetic and noble. (Meyers: *Hemingway*, p. 342)

#### IV

18) Meyers: *Hemingway*, p. 300.

19) Bernice Kert: *Hemingway Women*, p. 376.

20) Please know how much I love you....your are much better than me....

But like woman, and your woman, am sad only there isn't anything final, is there? This is just a short trip and we are both coming back from our short trips to our lonely home.... and then we'll write books and see the autumns together and walk around the corn fields waiting for the pheasants. (ibid., p. 384)

21) I need a wife in bed and not in the most widely circulated magazines.

(Quoted in Meyers: *Hemingway*, p. 350)

22) ノルベルト・フェンテス, 宮下嶺夫訳『キューバの日々』p. 69.

23) Meyers: *Hemingway*, p. 353.

24) ....she had always been terribly critical of Hemingway and had deliberately wounded him .... "I don't like the book at all actually".

(ibid., p. 353)

25) That's how it really was. Marty has always been pictured as an overly ambitious woman who neglected her wifely chores, neglected Ernest, and finally deserted him. That is the official version fed to papa's biographer Carlos Baker through Ernest's after-the-fact letters to his friends. But let's get the facts clear. Marty never deserted him. She was driven from that house in Cuba, driven away by the return in greater force of papa's megalomania. His idea of making Marty the writer in the family was doomed to fail, not because of her lack of talent but because of my father's compulsion to be Number One.

Suddenly he turned on her. "So you don't think I can write anymore," I once heard him say to her. "I'll show you, you conceited bitch. They'll be reading my stuff long after the worms have finished with you." Probably so, but God, what a way to treat someone you loved.

I after learned their breakup wasn't quite so simple. According to papa there was also a basic sexual problem that explained a lot of their arguments. It could have been easily corrected by a visit to a doctor, but my father rarely took the direct approach with his women. He just tortured Marty and when he had finally destroyed all her love for him and she had left him, he claimed she deserted him.

(Gregory H. Hemingway, *PAPA-A Personal Memoir*, pp. 91-92)

26) Quoted in Kert, *Hemingway Women*, p. 382.

27) *Hemingway Women*, p. 393.

28) Could you be my pickle? Sour but pungent? (Mary Hemingway, *How It Was*, p. 112)

29) [TWH.BWH...TWH.BWH] TWH は Typically Way Hair か。あるいは T は Tits, W は Waist, H は Hip, B は Bust かも知れない。「ミスター・スクルービー」(Mr Scrooby) はヘミングウェイ独自の用語で、男性性器を意味する。又別の手紙の「きみのビッグでミドルサイズでスモールな友だち」も同じことを意味しているのかも知れない。(『キューバの日々』p.472)

30) 同上, pp. 384-385.

31) *How It Was*, p. 128.

32) He (Hemingway) behaved quite differently aboard the *Ile de France*

- when the famous actress Marlene Dietrich entered the dining salon to join a dinner party already in progress. All the men rose to offer her their chairs, but she saw that she would make the thirteenth at the table and turned superstitiously away. Ernest stood in her path, saying gallantly that he would make the fourteenth. (*A Life Story*, p. 258)
- 33) .....had never been lovers.(*ibid.*, p. 444)
- 34) .....people in official circles noticed her good-natured way of getting things done.(*Hemingway Women*, p. 402)
- 35) There was this great sense of liveliness about her and she always spoke her mind.I was no threat to her in any professional sense and became the woman friend she seemed to trust.(*ibid.*, 404)
- 36) Mary liked being a good sex partner. Love-making was easy for her and apparently she did not place any demands on Ernest that he was unable to fulfill. Such easy acceptance was exactly what he needed after Marth's outspoken rejection.(*ibid.*, p. 406)
- 37) "....we ....burnt the Beech logs in the fireplace and made love at least every morning, noon and night and had the loveliest time Papa ever knew of."(*How It Was*, p. 369)
- 38) Mary understood his emotional needs and made a concious effort to please him. As she later said, "I wanted him to be the master, to be stronger and cleverer than I, to remember constantly how big he was and how small I was. (Quoted in Meyers, *Hemingway*, p. 394)
- 39) Miss Mary is durable. She is also brave,charming, witty, exciting to look at, a pleasure to be with and a good wife.She is also an excellent fisherwoman, a fair wing shot, a strong swimmer, a really good cook, a good judge of wine, an excellent gardener, an amateur astronomer, a student of art, political economy,Swahili,French and Italian and can run a boat or a household in Spanish. (ED Wiliam White, *By Line:Ernest Hemingway*, p. 473)
- VI
- 40) This is an unfortunate novel and unpleasant to review for anyone who respects Hemingway's talent and achievement. It is not only Hemingway's worst novel; it is a synthesis of everything that is bad

in his previous work and throws a doubtful light on the future. (Quoted in Meyers, *Hemingway*, p. 457)

- 41) ....indulging himself in blatant self-pity and equally blatant conceit  
.....there is hardly any aesthetic distance between the author and  
Colonel Richard Cantwell....(Quoted in Meyers, *Hemingway*,  
pp. 457-458; Philip Rahv, *Commentary* 10, [October 1950], pp. 400-401)
- 42) A.E.ホチナー・中田耕治訳：『パパ・ヘミングウェイ』 p. 205.

VII

- 43) Hemingway: *Across the River and Into the Trees* (Jonathan Cape, 1950)
- 44) The Key to making a woman happy in bed is so simple, Gig. They have a thing down there about a third the size of your little finger. It's called the clitoris. It's right in the middle. If you want make a women happy, really happy not just satisfy yourself, first stroke it gently, over and over, like your're petting a cat, ever so gently.... It's a woman's sexual trigger, sort of a miniature penis. And if you don't know about it, you might as well forget about pleasing women in bed."(Gregory Hemingway, *PAPA*, p. 98)
- 45) Adriana was an attractive girl with dark hair and eyes, high cheekbones, a thin but not too angular face, and a lovely smile that betrayed no conceit or overawareness of her liniage....  
....In short, she meriterd papa's basic accolade; she had class. (ibid., p. 109)
- 46) Now that Adriana was at the Finca, a house guest, relentlessly chaperoned by her mother, papa was ecstatic just to have her nearby. Not to touch, not to kiss, not to make love with. What did Mary think about this? I don't know. I never asked her. (ibid.)